

ある夏休み（二）

彼女とは共通点が多かった。

彼女は煙草を吸い、酒を飲み、ジャンクフード大歓迎。

ピンク・フロイドを聞き、お涙頂戴の映画は嫌いで、B級ホラー映画をソファに寝そべりながらチップスを抱えて見る。

リパブル生まれのリパブル育ち、生粋のスカウサー。

お目にかかったのは寒い冬の未明。たしか一月四日だった。

場所は、リージェントとボンドの交差点。

ヘレケに酔っ払って千鳥足を踏んでいた彼女は、信号を無視して車道へ進入。そこへ007でお馴染みのロータス・エスプリが突っ込んできて、けたたましいタイヤのスリッパ音を発しながら辛くも棘き逃げを回避。その全てを、俺は後ろから目撃していた。まあ念のためとその黄色のロータスのナンバーを頭に控えもしたが、特にその後この事に関わる事もないだろうと、その場を軽やかに通り過ぎる予定だった。

しかし、だ。

この酔っ払い女スカウサーは、何を考えていたのか、ヨロヨロとそれなりのスピードを出していたこつちに迫ってきた。(ちなみに俺はオフロードバイクを飛ばしていた)

人間を避ける為に反対側車線に突っ込む訳にもいかず——乗用車が二台交差点に差し掛かりつつあったから——俺はやむなく歩道にスライディングした。

結果的に、自分の左足とその秋に譲り受けたばかりバイクを犠牲にしてその大酒飲み女を救った訳だが、勘弁して欲しいのは、ビルディングに激突した俺を見てその女が貧血起こして『車道に』ぶっ倒れた事だ。

倒れるなら歩道に倒れろ！ つかか、怪我してんのはこつちだ！

と、一瞬腹を立てたが、まさかこの時間の、気温氷点下のこの状況に、一応うら若い女をこのまま置き去りにする訳にもいかず、病院へ連れて行つた。

病院へ担ぎ込んだのは、まず俺に治療が必要だったのと、女が目覚めるまでのんびりと路上で待機などという忍耐、もしくは悪くすれば家まで送るなんていう羽目に陥りたくなかつたからだ。

病院について時計を確認すると四時をやつと過ぎた頃。出来れば家には朝の7時は過ぎから連絡を入れたかった。が、夜間受付の気の良さそうな中年男性は、未成年の俺には適切な保護が必要、と電話を掛けてしまった。

おかげで、誰も居ない病院のロビーにて、真つ青になっている母親と顔を強張らせた弟、そして深く眉間に皺を刻んだ父親にご対面するという、思わず天井を仰いでしまう場面に直面した。

親父やお袋はともかく、アイオリアまで来るこた無かったのに……全く……。

足の怪我は全治五週間のヒビ。

俺は迷わず自宅療養を選択した。

その時は、どうにもサガ・チェトウィンドには会いたくなくなつたので、否、会いたくない、と言ふより正確には顔も見なくなつた。

この怪我をこれ幸いと、俺は嬉々として『チェトウィンド卿』の居ない生活を満喫する事にした。大体、何処にいくにも、クイーンズベリーでは奴の影が俺に付きまとう。

同じ寮で、今学年から二人部屋になつたルームメイト。週四回はある大オーケストラでも『仲良く』団員同士。

一月下旬から始まる新学期から学期終了まで半年もある。その半年のうちの一ヶ月なり一ヶ月なり減らす事が出来れば、願つたり適つたりだ。

この時の俺は、どうやって自分のテリトリーから奴の存在を消去出来るか、その一事に殆どの情熱を費やしていた。

言い換えれば、その他の事はかなり適当だつたのだ。成績がガタツと下がつたのもこの時期だ。チェトウィンド卿を避ける事に関して、全神経と情熱を費やす代わりに、俺はどんな事にも集中出来ず、考える事も出来なくなつてた。何かを考えようとすると、脳裏に銀色の光と緑色の温かい眼差しが差し込んできて、どうする事も出来ない衝動を俺に与える。

それは、人生で初めて味わう、自分の意志の力ではどうす

る事も出来ない敗北と、それに付随する惨めさだつた。

俺は、確かに奴の愛情を膝をついて請うた。そして、それは一旦受託されたかに見えたのだ。いかに奴がそれを巧妙に体よく扱っていたとしても、俺は一度はそれを信じた。捧げたモノが軽んじられた憎しみ、同じモノを持つていると見せかけられた欺き、どれもが強烈で、奴に関する記憶は全て消し去つてしまいたいと凶暴に願う。

何かを深く考えようと、思考の再構築をする途上の全てに、この不快なトラップは根を張り、自宅学習に書き上げた数種類のレポートは自分で笑つてしまうくらい陳腐で、ゴミ箱に行くしか価値のないような代物だつた。

一カ月後、学校のチューターから家に連絡が入り、俺の安寧は終わった。母親から話を聞いた親父が、復学を命じてきたからだ。母には、家でゴロゴロして、すっかりだらけ切つた息子は、やはり寄宿舎できつちりと手綱を取つてもらつた方が良いと見えたのだろう。そう、親父に進言する声がりビングから聞こえてきた。

ただ、親父はそれには何も答えず、一通り母の話の話を聞くと、扉を開けて俺を呼んだ。母が席を外すように言われ、驚きの表情を浮かべながらもそのままりビングを出て行く。

親父とりビングに二人きり。親父と二人きりの状況など何年ぶりだろうか？ シカゴからロンドンに来たばかりの頃、むちゃくちゃやつっていた時以來じゃなかいだろうか？

親父は、ふうつ、と深く息を吐くと、テーブルの上に両肘

を付き、その手を組んでじつと俺の目を覗き込んでからこう言った。

「それで、お前はもうどうしたいんだ？」

親父の声は強くも弱くも、怒りも苛立ちも無く、ただ低く俺の頭の中に響いた。その痺れた余韻の中、俺は何とか言葉を纏めた。いつまでもこの大事な時期に鬱々とはいられない。チエトウインドが自分の人生の中でゴミ箱行きの内容になつたのなら、その存在にこれ以上引つ掻き回されるなど愚の骨頂だ。

「学校に戻るよ」

そう親父に告げると、彼は尚も俺の目を覗き込んで、溜息を付いた。

「ヴェインセント、全てお前が望んだように事が運ぶことは、お前の世界が広がれば広がる分少なくなっていく。それが人生だ」

俺は見詰めていた親父の目から視線を外し、答えずに部屋を出た。今の俺が聞きたいのは、そんな言葉じゃない。

学校へ戻る前の最後の日曜日、俺は件のスカウサーのアップメントの前に居た。事故の翌日、直ぐに警察と彼女の立会いのもと、現場検証を行ったのだが、その時に受け取つた彼女の住所のメモと鍵を返しに行くためだった。

何故彼女は自分にこんなものを寄越したのか。

普通に考えれば、誘っている以外の何物でもないのだが、彼女の明るく素直そうな表情からはそういう匂いは感じられず、少し、興味が在った。

それで、プラスチックで固められた足を持って余しながら、チューブを乗り継ぎホワイトチャペルまで行つたのだ。

そう、このホワイトチャペル、というのも曲者だ。

何故、ホワイトチャペルに住んでいる人間が、朝の三時にボンド・ストリート駅周辺をふらふらと彷徨つているんだ？

ショーデイツチで降りて歩くこと十五分。古びたアパートメントに到着した。三十分には満たない散歩に息を切らして玄関口でどうしたものかと一瞬躊躇う。

そう言えば、この鍵はフラットの鍵なのか、共同玄関の鍵なのか、個人の部屋の鍵なのか？ と。

「やあ、君が噂のスーパーヒーロー？」

突然、背後から声を掛けられた。振り返ると中肉中背の眼鏡を掛けた男が一人、ミスター・キプリングのピンク色のケーキ箱を覗かせた茶色のスーパーの紙袋を抱えて立っていた。

誰だ、こいつ？

知らず高い位置から睨み付けると形になつてしまつた事を、少し怯んだその男の表情で知る。

「いや、僕もこの住人で……」

と、男はしきりに頭を下げつつ鍵を鍵穴に差込み回す。そして、ドアを開けると俺に中を示して入れと言ふ。

足を踏み入れると、何かつんとした匂いが鼻を刺す。先に立つて歩く男——名前をトーマスと言う——の後をついて階段を上り、匂いの正体に合点が行く。テレビン油だ。

アート専攻の学生達でシエアしているフラットだそうで、特色としては、カッパル同士のシエアという点だろう。トーマスはイラストレーション科の学生、その彼女のセリーヌは油絵科、他に3Dサステイナブル・デザイン科、ガーデニング・デザイン科、ファッションデザイン科と居るらしい。

で、俺に鍵を寄越したのはトーマスと同じイラストレーション科のケイティ・マクガソンという女らしい。夜には帰ってくると思うから、とそのまま居間に残される。その辺に散らばっていた雑誌などを拾い上げて適当に読んでみると、ふと気付けば時間はもう九時を回っている。バラバラとフラットの住人達も戻り、皆適当に夕食を支度している。

この中の誰かに鍵を預けて帰るか、と腰を上げかけたとき、ドアが開いてももの凄いい絶叫がした。

「ウソ——ッ!!」

何が、嘘だ!

振り向けばあの晩の酔っ払い女が、開け放した扉の木枠の中で、大口に両手を当てる顔を真っ赤にして立っていた。

「鍵、返しに来た。じゃ」

口を覆っていた掌に強引に鍵を突っ込んで、立ち尽くしたままのスカウサーの横をすり抜けようとした。したのだが、この女っ! 人の襟首を思いつきり掴んで……バランスを

失った俺は階段を転がり落ちた……。

「ほんとに、ほんとに、ごめんねえ!!」

無然としてソファに踏ん反り返っている俺に、ケイティ・マクガソンは何度も詫びの言葉を言った。

見事に全ての階段を転がり落ちた俺は、俺より一インチ程上背のあるポール・オリバーの肩を借りてもう一度フラットにトンボ返り。翌日の朝にディゴンというジムでインストラクターをしている環境デザイン科の学生が車で自宅まで送るという申し出に甘え、その日はそのままフラットの連中との飲み会になつてしまった。

飲む口実があればおそらくなんでもいいのだろう。つぎつぎにキャンディーバーの袋や、チップス、ビール、安いワインの蓋が開けられ、わいわいと騒いで、朝の二時を回った頃から一人二人と陽気な学生達はそれぞれの部屋に戻りだし、さて、俺も適当にこのソファの上で居心地のいい体勢を見つけて寝るか、と思つた矢先、スカウサー女に誘われた。

自室に来てベッドを使え、と。

そっちが誘つたのだから責任はそつちだと陳腐な言い訳を用意して、言いなりになつて女の部屋に行つてさつさとベッドに潜り込んだ。

少ししてから、シャワーを浴びたのだから、湿つた髪の毛の女もベッドに潜り込んできて……後はなるようになった。こいつ、俺が片足にヒビ入れて、尚且つ今日階段をスト

レートに転がり落ちたつて分かつているのか？ と、時折痛む体のあちこちのアラートを聞きながら女を恨めしくも思ったが、久しぶりに腕の中に誰かを抱き締める感覚は、思いの外に温かくて、懐かしくて、湧れないでいるのは難しかった。

「てつきり、貧乏学生だと思つたのよー」

翠朝、朝陽なんてちつとも気にせず俺の目の前で服を身に付けつつ、明るく笑いながら女は言った。それは、とてもあつけらん、としていてこちらの苦笑を自然に誘つた。

「貧乏学生つていうのは別に嘘じゃない」

「違ふ違ふ。あたしは、てつきりお金のない大学生で、怪我してバイトも首になつてどうやつて学費と生活費やりくりしたらしいのか真つ青になつていた、つていう風に見えたのよー。なんか、ガリガリに痩せてるしー」

ちよつと唇を尖らせてこちらを睨みつけるマネをする。これは、ご飯でもあげて相談に乗つて上げなきゃ女が廃る、つて思うでしょー？ と、きやらきやらと自分で言つた言葉に受けて笑つている。

彼女の言つているのは現場検証での印象だろう。そりゃあ、あの時は熱も出てきていたし吐き気もしていたから顔色は悪かろう。

薬を飲むと治りが遅くなるという祖父の言と、やはり、男が痛み止めを飲むというのは癪に障るので医者が出した薬はすぐにゴミ箱に捨てていた。ガリガリ、と言うほどには痩せ

ていないはずだ。体重は確かにこの冬は少し落ちたが、それよりもまた身長が伸びたのだ。

だいたい、自分程度でガリガリなどと言つていたら、あいつはどうなるんだ？ と、ふわりと癖のある銀色の髪を思い浮かべ、思いつき顔を響め「Shit」と舌を鳴らしてしまつた。

「え？ やだ、やっぱり体痛いい？」

いつの間にか、自分の目と鼻の先に彼女の顔が迫つていた。ぎよつとしてゐる暇もあればこそ、鼻先と額にキスが落ちて、痛いの飛んでけ！

と頭を撫でられる。

どんなガキだそんな誤魔化しが通じるのは！ と喉元まで言葉が出かかったが、結局飲み込んでしまつた。人の髪を嬉しそうに撫でるアイツの表情が、閉じた瞼の裏一杯に広がつてしまつたからだ。

結局、鍵を返しそびれたまま、俺は二月の二週目に復学した。

冷たい空気が、広大な芝生の上に鎮座し、時折冷気の塊がその中をゆつくりと蛇のようにうねる。自然、背筋が伸びた。

ここは、もうクイーンズベリだ。誰が弱みなど見せるものか。

ハウス・マスターのベネットに挨拶を済まし、昼食の時間に入った寮の自室の扉を開ける。一瞬身構えたが、中は無人でほつとする。

片手に引つ掛けていたコートを自分のベッドに放り出し、カラーの一つ目のボタンを外しネクタイを少し緩める。窓を開け冷たい空気を部屋に呼び込む。前髪をかき上げふつと息を吐く。

目の端に、チエトウインドが使っている綺麗に整頓されている勉強机とびしりと揃えられたベッドが見えた。引かれる様にチエトウインドの領域に足を踏み入れる。ベッドの脇に立った。腕が伸びる。指が、チエトウインドの枕カバーに触れる。白い布の上を、指が走る。

自分がした行動に、一瞬呆然とする。

目に、白い寝台がまざまざと焼きつく。

奥歯に力を入れた。

そして、一八〇度体の向きを変え、部屋を出た。

復学した時期は、寮は恒例のダンス競技の興奮の真つ只中だった。

カミュ・パロウがミロ・フェアファックスの代わりに女性役に立候補したとかで、口さがない憶測や捏造話が冬という季節にも関わらずミツバチのように何処にでも入り込み、ブンブンと唸っていた。

それくらいで凹むパロウでは無いが、結果が伴わなかったのは痛かった。なる程コイツでもこういう風に自己嫌悪に陥る事があるのかと、眺めていたが、ふと、二つも年下のこの学生を自分が大分高く評価している事も同時に思い知らさ

れ苦笑が浮かぶ。金色の狼が懸命にこのアカキツネの周りをウロチョロして取り付く島を探している素齋振りも微笑ましい。

他人の事は、今まで通りとても良く見える。

チエトウインドがいかに必死にこちらとのコンタクトを取りたくて近寄りたく思っているかも、可笑しいくらいよく分かる。始めのうちは、部屋での二人きりでの話し合いを持ちかけられたりしていたが、俺はそれを悉く突っぱねた。あの日からもう既に三ヶ月以上経つのだ。今更何を話すことがあり、話したいと思つことがあるだろう？

口止めか。

友達に戻ってくれと言つ懇願か。

どちらもお断りだ。

もし前者の話であれば、そういう事が頭に浮かぶ奴のその思考回路事態が我慢ならないし、後者であれば、そんな都合のいい望みがそうそう叶うかどうか自身に一億回でも問えと言いたい。

本当に、何処まで上品で、紳士的で、甘いのか、チエトウインド卿は。

奴の本性は、奴がソロを引き受けたチャイコフスキーのパイオリン・コンチェルトにツクツク良く現れている。綺麗で品良く、ごちんまりと纏まって意符の表面をなぞつただけの陳腐な型通りの演奏だ。

音符通に弾ける事が「凄い」のでは無い。意符という力を借りて、その皮を破り表現する力とその風に流されな技術

が揃って初めて「凄い」という形容詞に繋がる演奏になるのだ。それを、オケの連中は綺麗な音と正確さに騙されてちやほやするから、いかにも軟弱なチャイコフスキーが出来上がりつつある。

今学年から学生指揮を引き受けた都合上、自分のパートだけではなく、オケの全体的なバランスにも目を配らなくてはならなくなりました。奴の演奏を真面目に聞かなければならなくて、それが否が応でも自分を苛立たせる。こんなお綺麗な演奏で満足しているのだつたらやっぱりこいつは救いようが無い。

全体練習は五月からだだが、果たしてどう自分は棒を振るのか？ ただの学指揮として適当にやるか？ しかし、それではシユラやムウあたりには直ぐにバレるだろう。それも面白くない。寮の図書室ではなく、校内の図書室で総譜を覗みながら今のオケの音とソリストの音を頭の中ですり合わせる。全く、面白くない作業だった。

そして、三月に入って直ぐだったろう。その日、少し遅れて八角堂に入ると、耳を打つようなバイオリンが鼓膜に飛び込んで来た。

まさか、あいつがこんな音を？！
足音を立てないように早足で教室を覗く。

ミロ・フェアファックス！

曾祖父の形見という、色もニスも冴えない楽器ではなく、深く艶のある黄味がかったバイオリンを肩に当て、パガニーニを弾いている。

なんてこった！ 楽器で奏者は化けると言うが、これ程とは……！

弾き終わって呆然としているミロは、チェトウィンドの隣で呆然としてその楽器を見つめている。

いい加減こいつも、オンボロの楽器に変な執着を持たず、自分の身にあつた楽器を手に入れる算段をすればいいのに。

頑なに譲り受けたバイオリンが自分にとって世界で一番の楽器という態度、強烈な思い込みを崩さないミロの元に俺は歩を進めた。

「お前、楽器変えたのか？」

「あ、ロス、凄いなだよ！ この楽器！ これで弾くサガのチャイコフスキー、なんか、想像するだけでわくわくする！」

本当にわくわくしているのだろう、ミロは大きな青い目をさらに大きく見開いて、はちきれそうな勢いで捲くし立てた。その横から、おずおずと連う声がかかる。

「……あ、ああ……ミス・エヴァンスが手配してくれたんだ。十二月の本番まで貸してもらえらる事になっている。当分アマティは弾くと言われたんだ」

微かに震えているその声を聞いて、俺は皮肉な笑みが唇の端に浮かぶのを押し殺すのに少し力がいった。

楽器を変えても、奏者の中身がこの卑怯者のままでは何も

変わるまい。所詮小手先の誤魔化しに過ぎない。それを、今年やってきた若い音楽教官は見抜けない程度の人間なのか。そして、チェトウインド自身も、楽器を変えれば、今のミロのように演奏が、音が変わると信じているのだろうか？ だとすれば、浅はかだ。

俺は視線をミロに戻した。相変わらずチビのコイツの頭には金色の波が渦巻いている。それをくしゃりとかき混ぜて言った。

「お前もそろそろ、そのじーさんの楽器から卒業しろ」

「そんなこと言ったって……オレ、新しい楽器買おう金なんてないよ」

「それ以上今の楽器で練習しても時間のムダだ」
前、それ以上今の楽器で練習しても時間のムダだ」

顎でチェトウインドを指し示す。

ミロだって無欲でも、本気でこのオンボロの爺さんの楽器が世界で一番の楽器だと信じている訳じゃない。いい楽器に買い換えるチャンスがあれば、そして、それがさらに自分の音楽に自由な翼を与えてくれると気付けば、悩まないで済むわけが無い。乾いた喉を潤さずにはいられないような欲求で、自分の分身とも言える楽器を求めたろう。しかし、ざつと見数千万は下らない級(クラス)の楽器をどうやって手に入れるのか？ せめて百万級のものならばもう少し「庶民」にも手が出るだろうが……。果たしてそこまで考えて、チェトウインドはミロに楽器を弾かせたのか。

俺が考えても仕方が無い。

コントラバスの席に戻り、ミロの様子をそつと窺うと、こいつはいつもと変わらないどころかチェトウインドの弾く新しい楽器の音が聞ける、という事で興奮させている様子だった。ツクヅク人がいい。

そして、見るともなく目に入ってしまったコンマス席のヤツの横顔。

微かに、上気していた。

気付いている奴等は居ない。それくらい微かで、けれど、嫌になる事に自分にはわかつてしまっく微細な変化。

無意識に眉を蹙めた。

何か、違和感を覚えたからだ。

何故こんな状況で、微かな興奮を抑えるような、高揚した気分を押し殺している時の表情を浮かべているんだ？ アイツは。

深く追求しそうになつた自分の意識を、俺は慌てて引き戻した。今更、何を考える必要があるというのか、と。

復学してから、俺は週末毎に帰宅するようになっていた。相部屋の間と同じ空気を吸っていたくない、という事ともう一つ、ケイティ・マクガソンが所謂彼女になつたという事だ。